

木曾路名所圖會  
一坤

ル 3  
3279  
2





凡 3  
3279  
2

高瀬

老藤杜  
奥石神社



昭和十六年一月十一日寄  
尼野貴英氏贈

不  
精  
藏



蒲生野 武佐より中里むらり 西生木村

拾遺

蒲生野に玉のたまふは鶴乃ちとせし君が御代の教なり 後人言は  
新言ぬれを武佐でし火いふ山古れあつたに海をぬぼり  
とこの河より好風来りて身を以て都に引  
びておれり地書杖ふりては鶴の夢阿つて正の手に舞ふれり  
の造巻寺にほり乃草花居るに寝受さるわりの人  
中哀なり新す馬と紙上橋の舟舟ひはけられり  
物うれ

都出さつてくまあわらる青ふりてきこひぬる松風  
けしや出さくわらるの舟の系もとも行り老曾の裏より  
松むらり下葉ゆきおつたれ新ふりりりまをけり  
月日をまは  
かじれ新りもひふとくおももりかひそのりわれ下葉

本巻ノ卅五

老藤杜

西生木のひがしに老藤杜あり 南老藤と樹道の南にあり

大江公資

後拾

新勅

後拾

新勅

後拾

新勅

源泰光 後拾  
源兼泰 後拾  
源兼光 後拾  
源兼光 後拾

奥石神社

老岩の西村小あり 延喜式内之

二宮法親王 道朝

祭神 天津見屋根命

相殿小瓶傍神と奉るは里の生木村に

沙々貴神社

延喜式内之 例祭三月 初申日

ハ

祭神 少彦名命

例祭三月 初申日



は教養親王を宇嘉部親九の皇子と云ふは源氏の祖也  
大鶴鶴尊と申す

尚社之邊は源氏一統の祖神ありて神領一百石又讚列九龜

末極家より毛一百石附與し其祖定成宗と云ふは源氏の代也

十六人の國衆八十二人の郷士あり足利吉氏卿の時作と云ふは

官入道乃卷一國を傳香し其後又辺列二つに分まると愛知川を

南を江南依々本六角と号し又水城に依々本六角と云ふは

連綿として弘治三年己未其地兼頼義賢管領職を預る

屋敷と号し六角親極と云ふ是利の代

淨巖院 安土山あり淨去宗

奉尊阿彌陀佛 徳心街那の作

用山隆寛法印一山の禪寺と云ふ天正七年三月申旬は

遠景山總見寺

本尊十一面觀世音 安土山あり

三層塔 大日如來 天不動明王

圓通閣 華嚴經の巻の巻

總門類 信長公の法華經 總見寺に書

當山を天正三年信長公の御建營ありて用山と剛可和尙

寺領は今も二百廿石餘附屬ありて寶閣壯麗として清淨無垢

の梵刹を奉堂の中は彫像を見らば持世永徳が宗ありて男を其

と棒を携へ杖懐紙約する園あり

信長公其讚云 人々も身をばそちよふ所あり

今も代更りて香火寂寞として雲佛屋瓦花々猶時を



晴く樹々を緑屋小池くよりて若く更し青く月八朔と照り  
てむくにわづかむとれり

安土山古城

信長公の墳墓あり今ふ城中の石垣なり

信長記

正二位大納言兼右大将平朝臣信長公は國安土山を城郭小構可  
有御移して奉納先惟住の即左衛門尉長秀と可成是方天正  
丙子正月上旬被作出し長秀大札の栢園御體を兼く日十七日  
安土山より先遣信長公可入具足成と被治表近城も石集ありハ  
石を取べきと持運て谷兒通路活沢とも云は胆崖とも云はるる  
走白く夜と日小續く意多る二月廿三日小信長公安土山被移御座  
精力と勵と幸神妙ありとて周芝築院并駿馬二匹長秀小下れ  
るを依近留外操馬廻以下の屋浦刺ありはれ所も産兒山上下を  
更安土池ありり四月初より廿九日垣の石を引せらる小土石を引し  
幸日小池増月一粟より何共御下知とありりはれも我者ト

本居三十七

中土石を幸ひ上る幸巨靈抜山鳥獲上干釣小是れ幸城終む  
其功已小成以都て信長公幼より弓箭に推せ仁義道德の學を  
勢子ども自然小私心形く理小曉く抄りはれ功の益進む幸恰め春  
氣發生貴罰正しく邪正辨る小幸生知も申以て激小方寸  
虚明る小思ひはれ幸自西自東自北自南思て服せ

近州史 安土殿守 天正四年七月より 普清御付

- 普清奉行 本村次郎左衛門
- 上一重之金具 後藤平四郎殿之
- 二重目より 京初對阿弥金具
- 序丈工棟梁 岡部又右衛門
- 小細工序丈工 宮為遊左衛門
- 漆師 首 刑部



瓦焼

唐人一觀

李東苑の瓦焼

土基土瓦の瓦格七間併は上小七市の天守公造らる條は永代未だの經  
 營より先一重と土瓦小用られ二重は上の廣サ南は二十間東西十七  
 間高十六間中これあり柱の數式百格中三柱の長サ廿八間をサ定守  
 或は天守四角之御座敷の内みか黒漆より西十二間後金の張付  
 墨繪梅花狩野永徳の筆は日間の内書院よりありより遠寺院陸  
 の画其茶の飯も盆も石瓦瓦片の四をサの御棚も此の画又十二間  
 此間も武書乃後園之我鷲の間より次は八間後奥四間後廊の雜と  
 是より南十二間後も八間後漢唐の儒賢の画は八間後東に十  
 二間後北に三間後其北は八間後これ御膳梅の所は八間後  
 右はより六間後御納戸又六間後これ後庭の西六間後北に十二間  
 小土蔵あり其北は御納戸より西六間後北に十二間  
 後十二間後都合御納戸の敷七所これあり其北は金院地を湯と

並れる

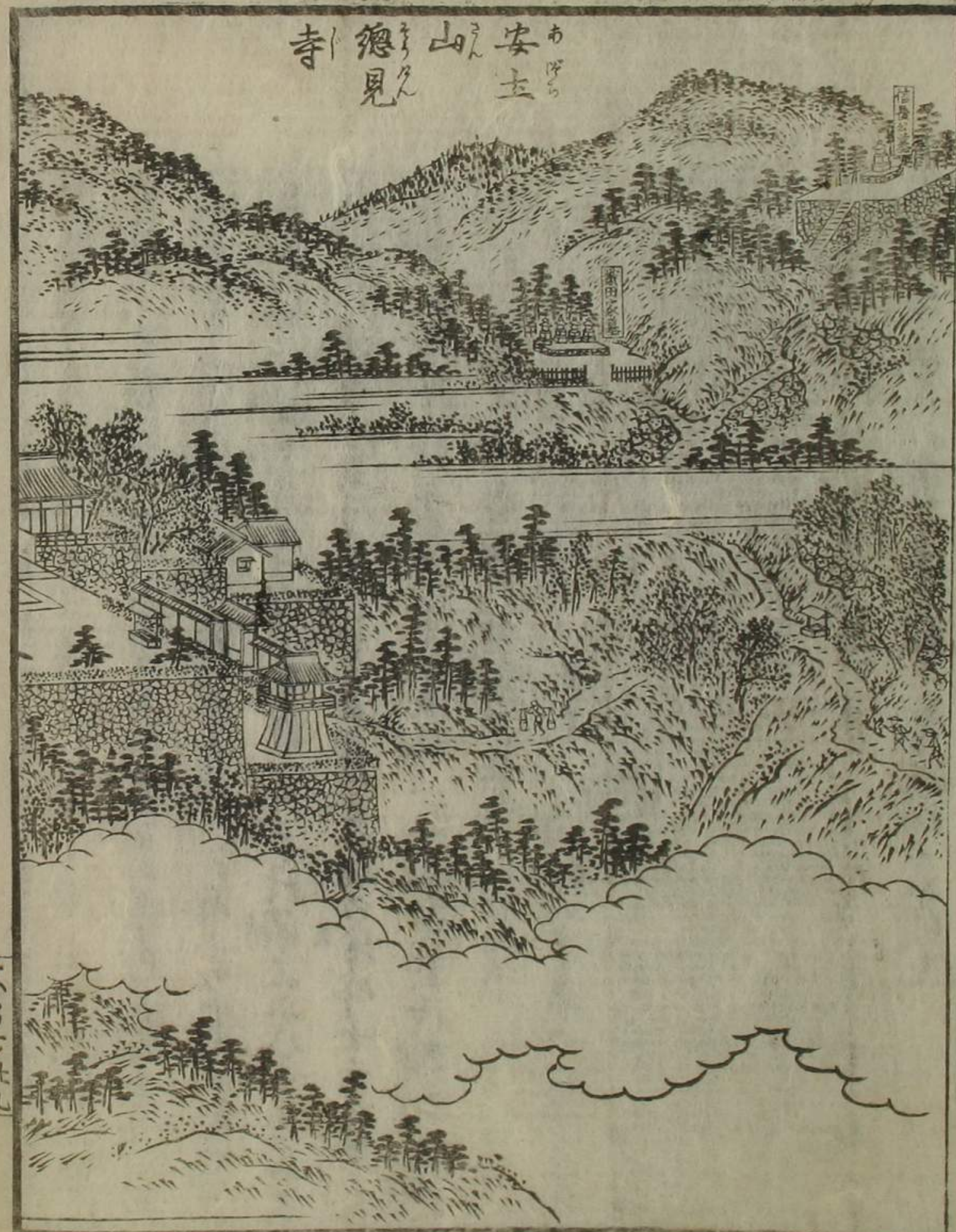
三重目十二間後花巻の画はありより花鳥の間より別小四間後  
 御座の間より花鳥の條は南八間後賢人の間より小瓢箪の  
 駒と知仙人の画東北庇の間八間後十二間北間上小八間後仙人  
 呂洞賓傳説等の画より北二十間後も八間駒の繪は十二間後八  
 西王母の画西座敷も六柱あり廣楯二版廿四間後御物室は御酒  
 戸は八間後御座敷より柱敷御格本三柱あり  
 四重目為十二間後と巖上小龍虎の觀は後より南十間竹の條  
 竹之間より次十二間後松と画は松の間より東八間後相小鳳  
 凰の條は八間後許由頼泉龍もて耳と滑小巢父牛と素も  
 隔ふ兩賢の如くは板郷の條より一画其次小座敷七間後後  
 形は金院よりけ次十二間は内二間の所は手鞠花と画は其  
 次八間後庭子北窓は画は板小座敷此間よりあり





安土山勝古  
遺構山上寺  
發園倚臺宮  
草木蒼丹古性  
藏賦空懷若全盛  
日經營一河工林池  
均江水樓基以泰  
宮初據竹未已征  
馬驅西東堂身身  
上夏乍起蕭壩中  
築遷泉所城三日  
酌林旌蒼天自  
予已低手波豐公  
博之二百卷電運古  
夢同孤雲雲溪流  
蕭翠草青蒼香  
火長帛昔焚傾  
夕暮風

西歌服那蕩



安土山勝古  
遺構山上寺  
發園倚臺宮  
草木蒼丹古性  
藏賦空懷若全盛  
日經營一河工林池  
均江水樓基以泰  
宮初據竹未已征  
馬驅西東堂身身  
上夏乍起蕭壩中  
築遷泉所城三日  
酌林旌蒼天自  
予已低手波豐公  
博之二百卷電運古  
夢同孤雲雲溪流  
蕭翠草青蒼香  
火長帛昔焚傾  
夕暮風

本卷之卅九



信長記

五重圓鏡あり、南山の彼風は小西寺に此方あり内外ともに色相  
朱塗内相全相あり繪を敷き成道法徳の圖十六大弟子を圍む  
淨極劍鐵鬼諸鬼を画し、端板小龍就出馬し、高標葱實珠彫物  
あり上の七重二間四方淨度殿の内也全泥より外輪も亦全泥に  
四方内相昇龍降龍天井小天人龍向の躰を畫し、淨度殿此内也  
後三皇五帝孔子十哲高山嵯峨晋七賢筆の画に狭間の戸織物之  
敷六指飾品柱みね黒漆にて布を着く其上堅地も黒塗より漆以  
て畫し、是故おとせり其の壯觀也

其頃天龍寺に妙智院兼養和寺とて碩学多才の住僧あり殊小  
大明再渡和漢兩朝の達人なる由奉世のいあり是れ信長公より安  
土山の記を傳ふ望ありたりとされども因縁ゆへに幸濃別荘下南  
北和尚とて名儒あり、まは則此僧小住付られ、然るに住人よりこれ  
より其旨傳流ありけ人も亦兼養和寺へ令せり、是宣おのり

總見寺圓通閣不掲る

互小禱し合ふ、即ちも合致浪るれば禱する不らして則ちを  
傳るる其記あり

古曰太山之前難為山、大海之前難為水、日域六  
十六州之一州曰江、江左有山名曰安土、其山不  
在高、其名高大山也。盖夫非山之獨得名、有寬仁  
大度、人居焉也。劉夢得不豈曰乎、山不在高、有仙  
則名。水不在深、有龍則靈、夢得之一言可并按焉。  
層巒之崎嶇乎上者、自然金城也。滄波之渺茫乎  
下者、自然湯池也。自天地開闢以往、雖有此山、一人  
無識者矣。葛原帝王的の令孫平清盛、北一代之  
華曹、前右府君者、禁庭綱紀、武門棟梁、而實天縱  
聖武也。先是天正四年之春、一見此山、便識萬古



城地開闢洪基權輿于此矣力士星馳揚石巧匠  
霧列運斤則不終三年而其功大成矣潛慮夫數  
百丈之石壁千萬間之大廈何翅力士之力巧匠  
之巧乎唯流出府君之一胸襟而已目機之所明  
意匠之所巧離婁之明公輸子之巧不可跂而及  
者也峻宇高堂之凌碧虛者也極夜摩都吏之壯  
麗兮直欄橫檻之聳翠崖者也盡秦樓魏闕之華  
美兮布地礪礪者柔露內潤葺屋瓦甍者帶霜外  
光西湖月之上玉階者供府君之夜遊也南浦雲之  
飛畫棟者催府君之朝吟也颯颯松風之動金鈴  
聲呼萬歲山耶紛紛白雪之映珠簾影含千秋憲  
耶權門貴戶之圍山穢然也遠水鱗華也盡是無  
不丹漆黝亞寶塔之突兀出林間者疑繪遠寺釣

艇之入浮蘆邊者怪圖歸帆瀟湘十里風景嘉  
陵三百里山水不可同日語焉英雄豪傑之擁繡  
鞍出入于相府貴介公子之翻錦袖往還于官途  
爭紅花紅葉色也億兆民之富驕者鐘鳴鼎食之  
家也見者反目駭汗聞者拍手賞嘆矣江北白鷗  
懷惠占開江南梅花被化含咲信及豚魚咸知草  
木當此時市人歌于市野老扞于野行者遜路耕  
者遜畔雖堯舜民文武民不可讓焉加旃起王道  
之衰修神社佛閣之破續斷橋平嶮路是故四夷  
獻貢來復焉八蠻解辦服膺焉或臂俊鷹乞臣乎  
其幕下或上良馬請將乎其麾下吁策勳偉矣哉  
鳳凰現瑞麒麟呈祥者非今時何時乎祝望祝望  
向所謂太山之前難為山天下人亦將曰安土山



桑實寺



之前難為山野衲雖蓬衡叢州樗散陋安管見此  
名山豈無感慨乎卒綴卑詞於八韻述盛舉之萬  
乙

伏乞

咲覽

六十扶桑第一山  
宮高大似阿房殿  
若不唐虞治天下  
蓬萊三萬里仙境

老松積翠白雲閑  
城嶮固於函谷關  
必應梵釋出人間  
留與寬仁永保顏

岐下沙門玄興拜稿

信長記云

信長公沛幸也小應下谷南化和尚へ黄金百兩小社三堂將建又  
此布使として其芳功を對せし所又兼表和尚の深徳甚沛感有て  
金子百兩銀子百兩小社三堂二位法印沛使として恩賜せられり  
後より深徳却て光まるといふ箇様の事坂や中毎にけんの事性は何



幸も辨陽して已達せん人と達せん事ありて之を金銀玉帛  
そのくまむせん自説の受をば圖と天竺寺破壊の跡を補ん幸と  
たもたすもこのひのり福齋と付ゆひは且六定不帝とゆひるを  
たり此記すとも字力おしくしと言繼る所なりた幸言繼と應も  
得くさる世の人今ふある中をも其公せんも一幸なり

押は城古信長公天子成學少く終ひし初るれ其威勢強大はて  
城も天守と建り一幸は附りし我志く是て其城諸大  
夫の家訓と百千の文履射場とる人名存存存此種と城下圍繞  
さる幸秦の阿房宮もをせり考ふ所は推りし時小天文十一  
年六月十四日未明小安土城の天守小明智左馬助大坂教ち灰  
煙と形も憐む一は附焦土とあり然今は城墟をみる小巖小雀鬼  
ろて軋龍の形と遠く林樹と暮暮とて騰く天守の址也惣見  
院殿の古蹟は建す前と小石壁礎石あり北の方と湖水側院と

しと和のゆきと鳴て所沖也竹生鳥多鳥多鳥と形も向ふは  
は良嶽比殿の高根也意の崇む一長等の小列と遠く眺み  
おしの方ををふ日之と南の方と園園眺とて之上と東  
風多東も桑實寺觀音寺の古殿も小滝生野荒蕪とて  
みねは城の眼下に遠く小押織田家の滅亡を望し小秦の秦城亡を教  
めり只天命ありて一睡の憂乃是る如くもり也思はるる

織山桑實寺

本尊藥師佛 十二神將 脇土師老 願光

當山は古寺ありてむり白鳳六年奉尊湖水より出現あり  
其後元明帝の清寧鎌豆公の息定惠和尚唐去より帰朝し  
素寧を携来すより植り小巖洞を法を教めい當山は建管し

箕山古城

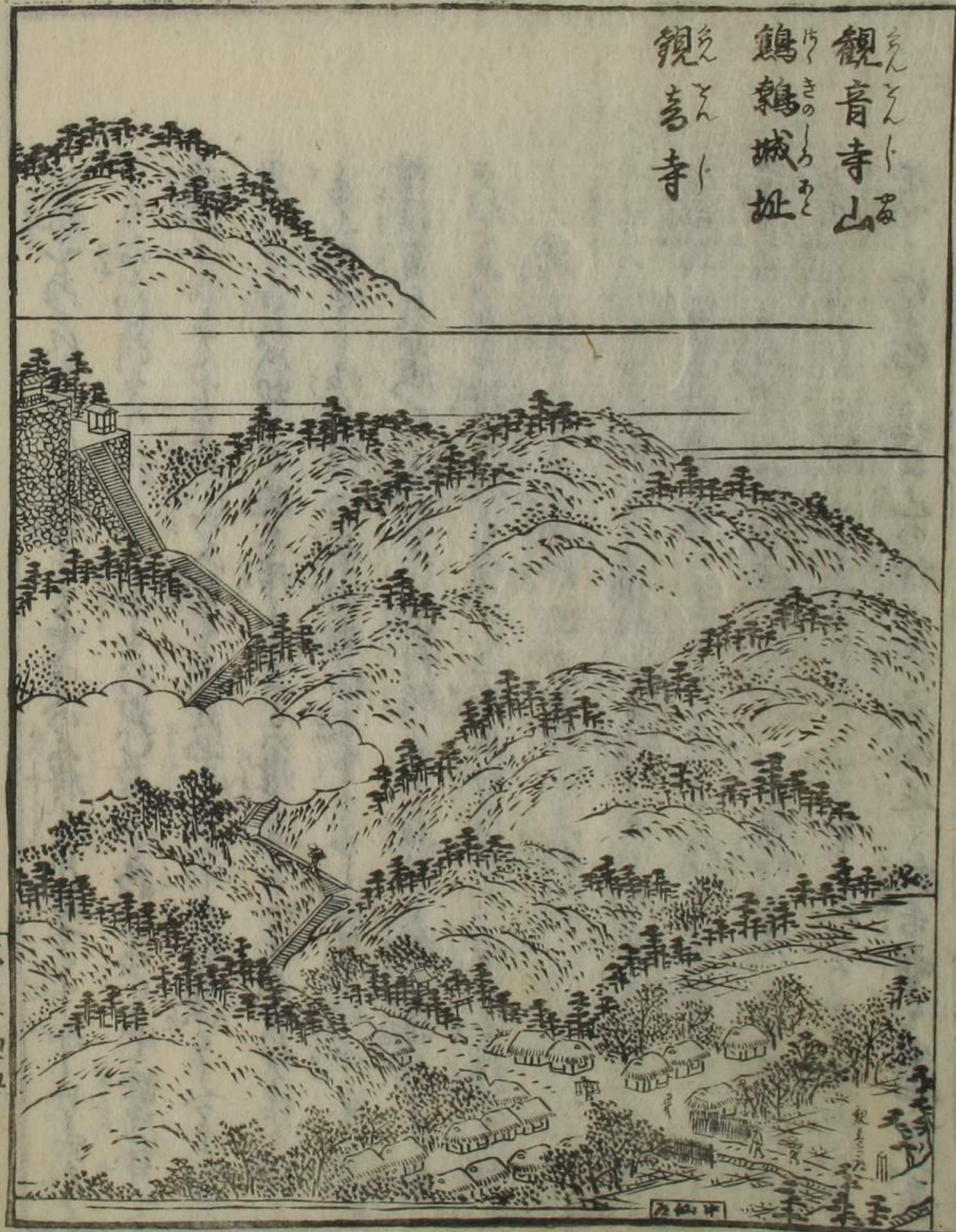
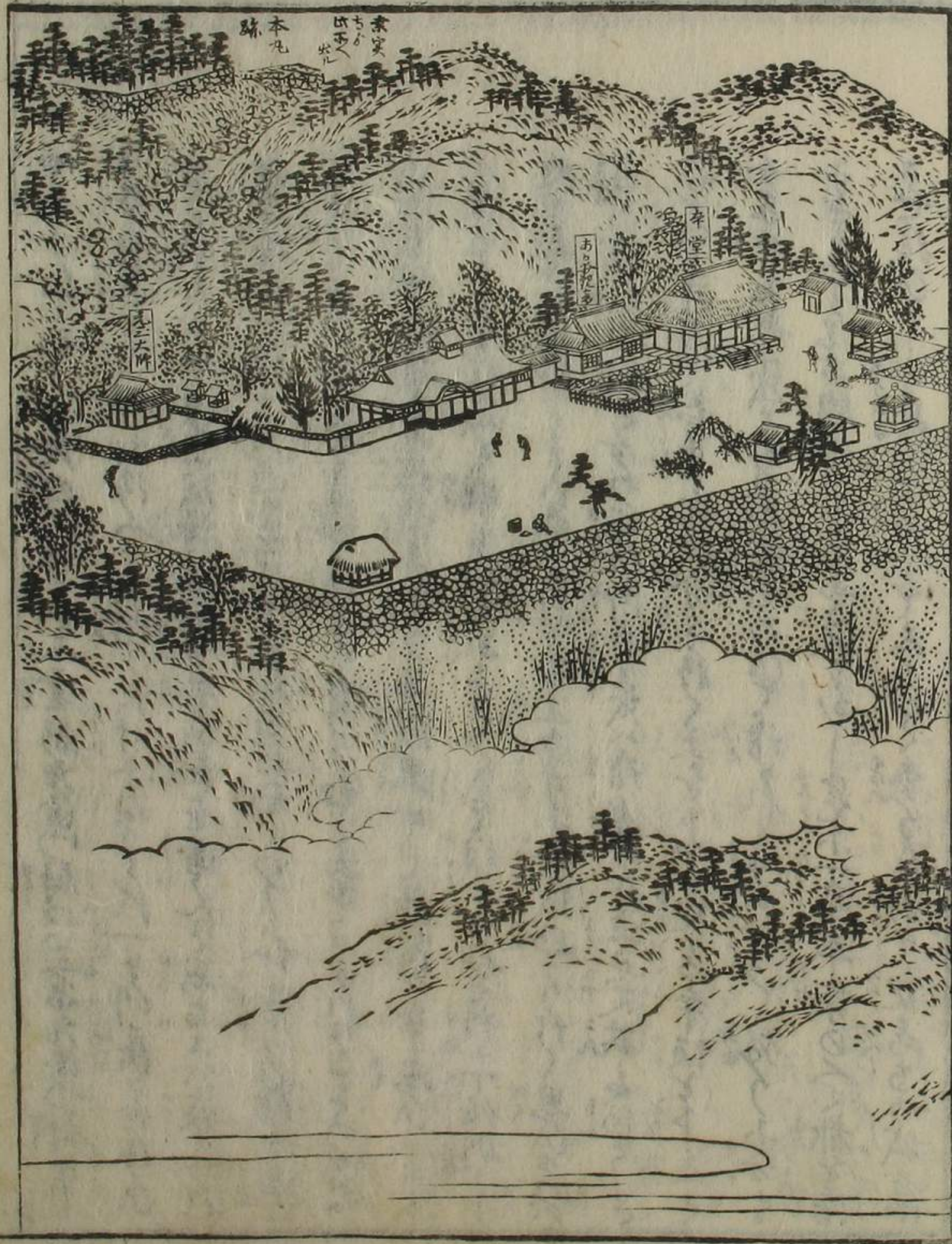
東山道武佐より二里許 右の方あり



去程不抜開齋兼禎子息を傳つ督義勝も兼て家老の者た石家信長  
 西園寺義向せは定て海道筋の城を先攻めし御庄留山の城はは  
 の手宛として内々梅をうけしむしやて南郡を幸ふあつる江  
 坂をうり勝と兼て一信長の當玉の徳園を毒細申うし之を江  
 の難易善好くび小敵の謀計をも略に入る馬ぐしを回尋せしむ  
 親善寺和同山へ押寄せる様ゆりて和同山へ入る徳之丸を押し  
 居るを和同山より奥より善徳の方勢を押し廻し路は依り本  
 相遠しとせ見せしる依りる石傳の尉本下藤吉丹羽吉高を傳の尉  
 浅井新八を兼て其徳の責も不定しれる幸もれを闘をゆりけく攻  
 寄りる本城の内もと吉高の河原建地源八を兼て花を山守入敷と  
 下し一とせし人せしけしと徳と弱くや命絶く人殺をうり害せ思  
 城も徳は叫と喚んぞ攻る間しはし城守へ引入んと走ける追保  
 山の事ゆりて早徳と兵ども或は騎許討た勇ふしんとする幸もれ

け勢とぬるはあめりや者ども中口の玉將言を様とて下知しは是れ  
 より中む新うり形ぐくあもたむむ登る病むく中城守付て  
 旗は物もんと夜入打入面もやん入んとしを敵とてや  
 思ひ及んは放却して其不徳とまするに推し中入るとひはれを依り間が  
 多小與せし作之間久六原田與助本下く多小與せし竹中半兵衛  
 將領實義を傳の尉本村隼人正丹羽多小與せし林志鴻形と兼  
 かねと是と持と持と推し進も一合攻助れしと旗とを洋を洋不  
 して隆之きと申する間即は由を口人の大將之復きし多小信長の  
 も幸もれ多小ありしる間依りる進もあすし城中の老も一合  
 と助多味を傳る中登れとぬむしうし推しとや何ひ中れは鬼も  
 角毛幸の徳中し小斗ひ依りて空ひり万其水攻傳る勝園と兼  
 と兼よりる依り本業よお遠しとせ見せしうりた其徳城守  
 せせしゆりて留山の城も其夜用退く親善寺も鬼やせん角





観音寺山  
 鷄城址  
 観音寺

本元一四十五

乃松中



やあしんせりしれんをさるる小三雲新左衛門尉日三右衛門尉申  
は家と皇小三とをせ給ふも浩くは叶ふなりん一す川落をせ給ひ  
身と金とて時言候侍た金替の恥を雪んと思召さる疾けれ  
等が居城へ逃せられ候へ家老の面々つて計存られ候声  
放致し申はれ者も内々退くありむと毒中されたるそのうな  
あの鬼神の掃らる信長小早うも成果中く敵討ち幸思ひもより  
は惟まうせは夜も明らむ早まうと空月とれは救年候別  
所るは候波とくいあんれも上り小舎城助うたけ思ひは共  
自れ執之と切とらわ何の御曹子候は准圍中候言丈其は何とと  
形どらう許申君上り此分を移く上を上げ親善寺坂と下立と  
女子共と聲候とあり小悲とありて誰れと噂と聲く候り小分も  
さうら形と親善寺坂と言ふとあり一室小早平家の人々都と落  
とせ給ひ一室と角やとせ給ふとあり親善寺坂の城落

去りたる御説小権藤一様共一日二日の内小十八箇節中て用退を  
其外味方と候る事と仕人質を取其病小己が居城とせ給ふも皆  
退散したる城と共宗徒の人々入置れあり抑迫に國中の城々將集  
御のてく波羅とて落去りたる幸は信長郷の一胸襟より知る  
智謀とるぞ和留心らんとて攻めり候り候と兵城は多く亡ひらる  
簡秘よとて入り申り候り兼て敵の謀法よく聞取て候とせ給角  
と給りりれ味方謀畧の益する幸奉てやさんもいつ斗ぞと候  
井が家老小赤尾英仙申たりは共備の人定て候と智謀の深さ  
幸ちり候りや漢の高祖の天子成保しを居置り張良ありて謀法  
惟幕の内小めと王著此作中成し幸も有り今味方の將小本  
下秀吉ありて深慮外小あり候り幸如漢等し候漢とせ給る  
小松寺 箕ヶ山尾續と小平坂といふあり  
瓦屋寺 小松寺より十洲津東にあり聖徳太子の御建營の寺あり  
ひり 親善寺東大寺の尾をば所め候とあり今ハ様宗



雲居流り 懸扇百ヶ所  
織山親音心寺 奉衛道清水鼻の左乃山より

奉尊千手親音 西園巡礼三十二巻の北所

毘沙門天不動明王四天王

奉堂の殿櫃小安堂

關伽井親音 安堂の西

元三大師堂 奉堂の西

當山と徹山五箇寺の其一ありて聖徳皇の弟剣之孫あり

依之本家近州を死すより修造敷より織田家の騷擾あり

親音寺古城 石壁に多し

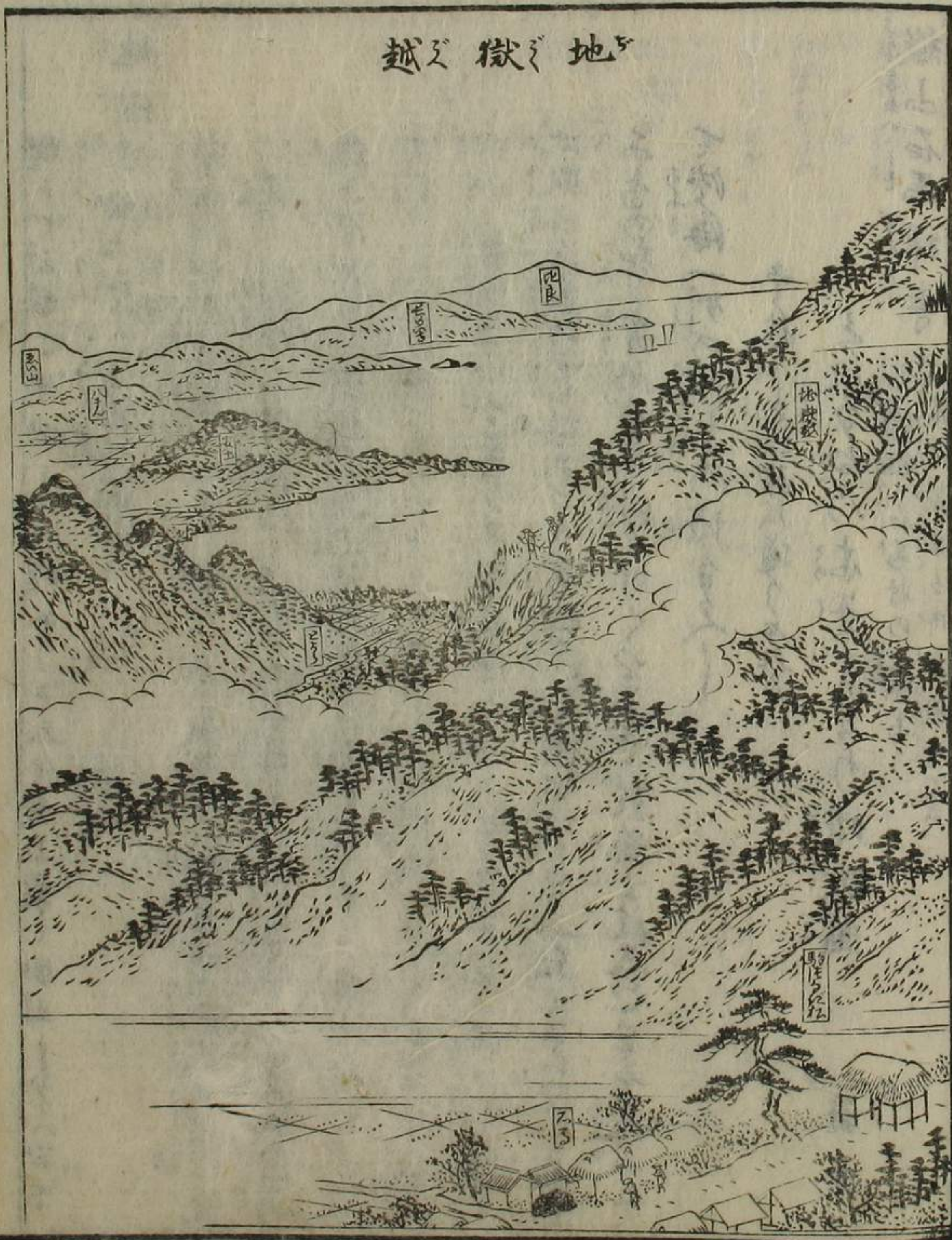
足利義昭が光源院殿清全身南無一宗院清門主等を度得業と

中世教あり小三好左系を義繼反逆して義輝公と戦ふ所全身

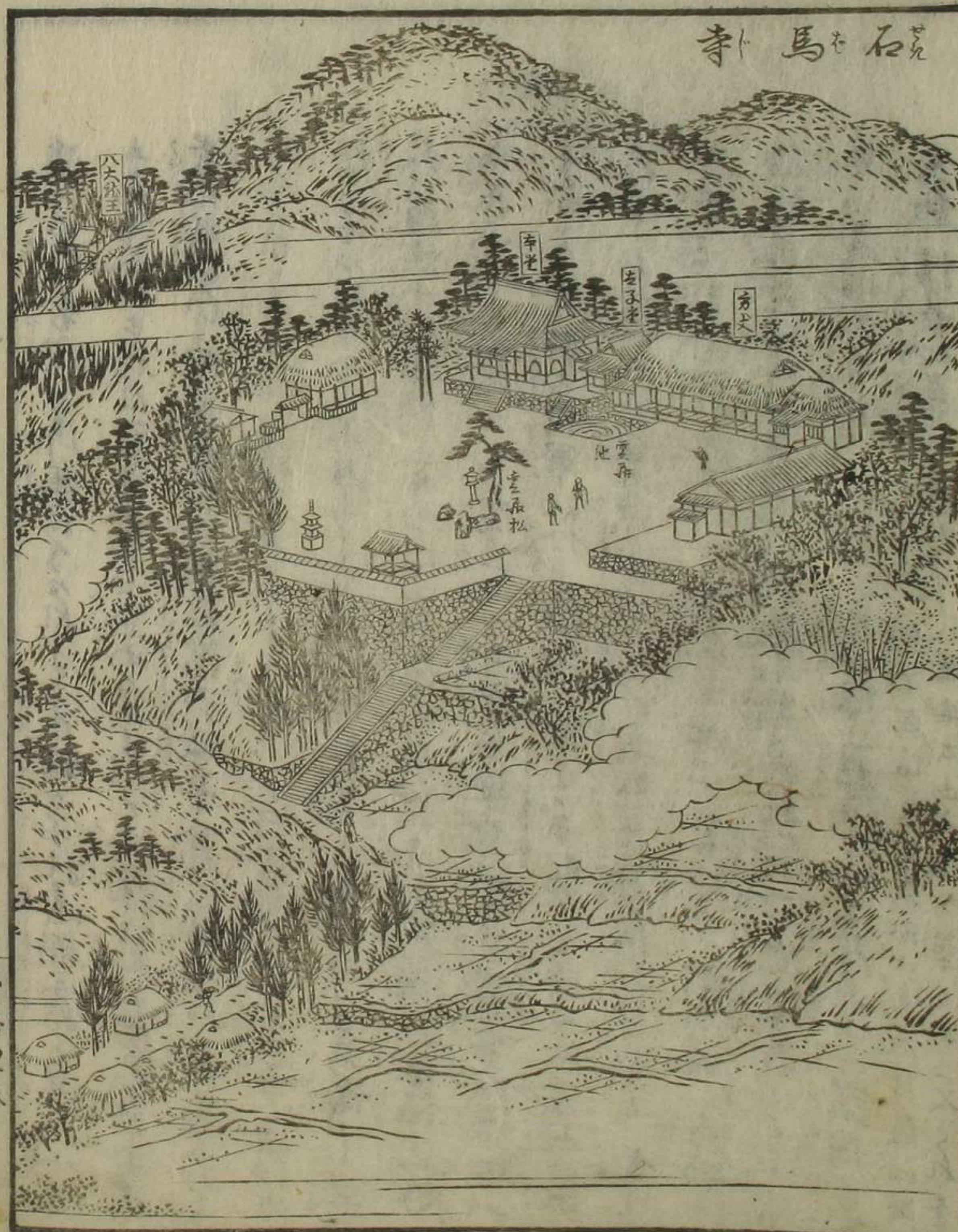
辺江の親音城を清應ありけれども兼頼が子北義彌三好と其に一味  
を少少動かさるは討を必す企ありしに小國と討にさし以済全義  
景公頼ありしも果さる因茲濃長波年一討に織田信長と清の  
ありこれに即君臣の禮を言んと合辭し其清陽洛の首途に辺江の  
依之本城攻めし不月ありて其地城親音山和回ると其城一其  
外羅城十八箇所三月の内中攻落し辺江一島も平均し永禄十一年  
九月十二日上原一三好を亡し中望公逆會稽の秘公を討つる由  
それより義昭公將軍に任じ給ひしより一義昭公と信長と不快  
其幸と信長叔父の諫書公に義昭公に給ひしより一義昭公  
甲斐信玄と討つるに西公の同族を害ふありしに遂に手相と  
形不元龜三年七月宇治枝橋小楠義隆は信長を討つるに攻  
敗る義昭公方なく河内守毛利元就は信長を討つるに攻  
京都信長は幕下小幡氏 或は信長公天正四年二月辺江に



越之嶽之地



石馬寺





地獄越

觀トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事  
難トて此路は伊勢とらへ難ありそれ故に難く安土とらへる事

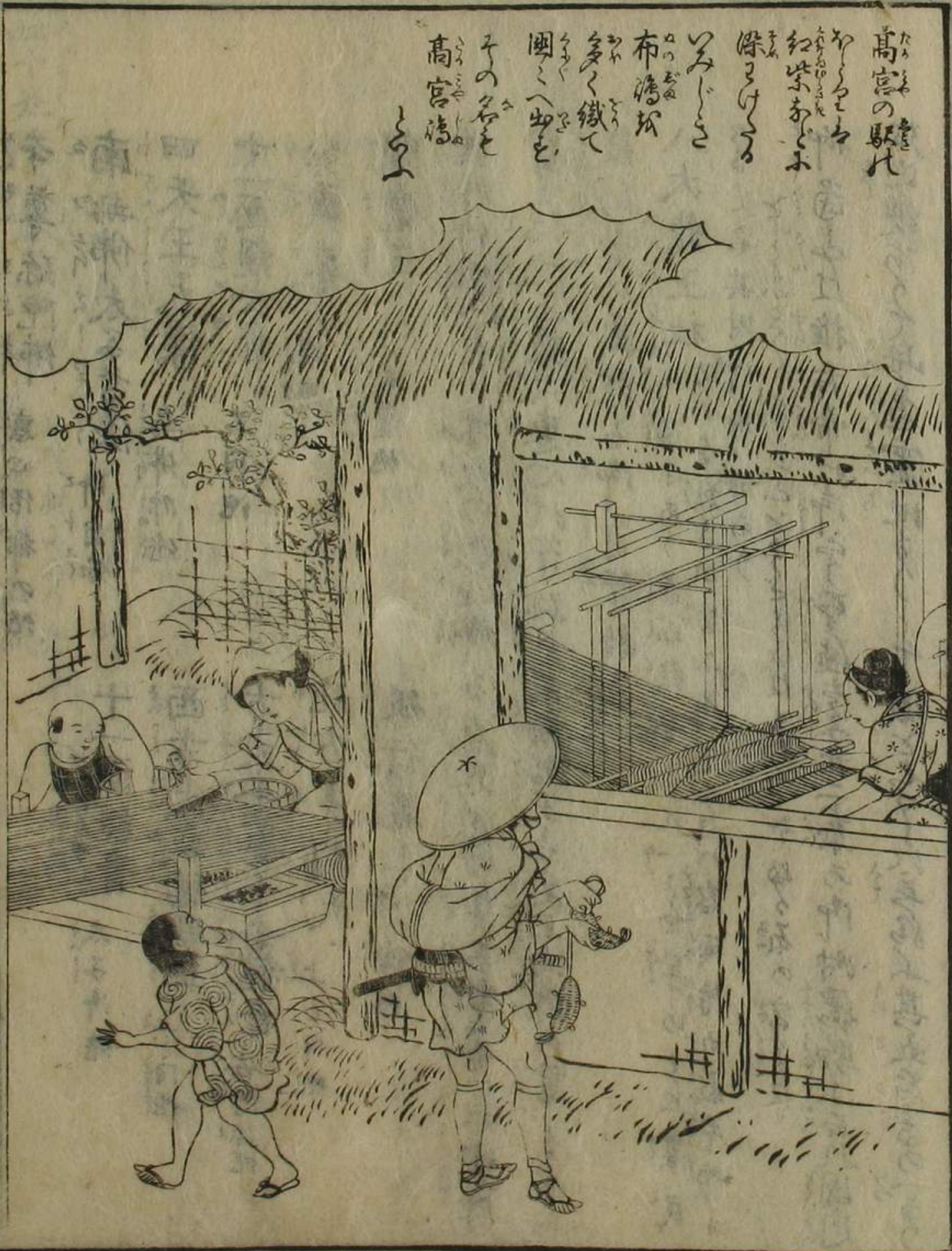
織山石馬禪寺

神祇郡石馬村の上にある  
禪宗派家まを京都織山と云

これら乃本葉落たり地獄越

雜音

高宮の駅  
紅紫あふふ  
保まけら  
あまのこ  
布漉坂  
多く織て  
國へ物を  
その名を  
高宮流  
と云





奉尊弥勒佛 惠心傍都の地

南無佛太子像 佛自作

四天王大像 鳥佛作也

十一面觀世音 右日也

地藏尊 運慶也

閻魔王 小世尊也

其外竹實もは朱夜の釈迦佛と唐思恭の等不動尊の弘法大師

の弟弥勒三尊の惠心此等跡見不動明王と元三大師の書も有る

役行者の画新と佛自作也

八大龍王社 山頂小あり當山鎮守といふ一ヶ所旱のときは農民

多ると名其時神像あり

柳苗少は推古帝此佛宇聖徳太子此二案の神時驍駒小は國內

城巡視ありて此處靈地ありとて鐵と名に五箇所の二あり

又良馬もけ里小なり終小覺く石も板小寺の跡と其石

馬今寺の藤農家の形あり年歴千歳なるは運丸の附大石荒草

せ以迄年雲居禪師も末門とむりは喜々以再嘗あり則堂

前と棟れは雲居松も此禪師と正保の頃乃よりて後光徳院

崇長と賜ふと世間へ

愛知川 源は遠尾尾流た東尾より水出流流勢田の神神は

名寄 高宮中を武里八町に宿と黄葉の名存ありて能水も遇ふ

形り流を一溪葉とて

け駐所とて古橋村ありけ道とみ物布橋と織りた高文橋と

りよ老懸橋を造り千枝村ありりよ四十九院村とありこの

由流流るる小舟流流の寺あり

四十九院唯念寺 四十九院村あり船率此と号に

奉教古末寺東風





奉尊阿弥陀佛 髣三尺髣

南山寺聖武帝の御宇行基大士の御創し初と法相天高  
氣兼宗師の御宇行基大士の御創し初と法相天高  
此の御宇行基大士の御創し初と法相天高  
後光厳院の御宇行基大士の御創し初と法相天高  
号衣衾を賜ふに御宇行基大士の御創し初と法相天高  
庭中四十二間の假山林の中は御宇行基大士の御創し初と法相天高  
紫石口尺許は石聖目毎天より下る夜を御宇行基大士の御創し初と法相天高  
土中あり

馬塚 園後小あり弘長年中僧の老女馬小せり  
其馬は御宇行基大士の御創し初と法相天高  
は寺の中に養ふとふ御宇行基大士の御創し初と法相天高

あつて色々々御宇行基大士の御創し初と法相天高  
信長卿の代と御宇行基大士の御創し初と法相天高  
ありと御宇行基大士の御創し初と法相天高

高宮川 郡の名もよて名づく

高宮

鳥居中を一里半は駄と布漕敷をよふ家多し  
けりり農家に高宮漕細布多織たなりとを  
高宮布とよ宿中小まかを有あり是より南三宿間許

多賀大社 大上那多賀小あり延喜或内

奉社祭神 伊弉諾尊

末社 奉社右の方小神明兩社 向日社 熊野本宮 日新宮  
天神宮 蛭子社 子安社 荒神社 大將軍社

拜殿 樓門 奉社の日出格 神本中社の

壽命石 奉社の前あり一名及掛石又枕石ともい後宗坊  
再真せられり十八年目小成務去けり

伊弉諾尊 構幽宮于淡海之洲 寂然長隱

伊弉諾尊 登天報命仍留宅於日之少宮矣

又云







古事紀云  
神書鈔云

伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也

日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也

近江在良方日之所初出也故曰日之少宮出

雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社在天照太神乃予之弟神母て浦一せは伊勢系

宮の事道をおくすふ多く伝をり例系を卯月二年の日

て神坂おんとて遠近のく高宮の所小群集して纏ひをりて

は沛神乃威徳形之別表と不動院とて神領二百竊石社地廣

してある耐と芝布向う相撲ありて世より懸ひいんはは河川を

は國の大神ありとせきとあり

多賀より田院をばさひく一里才なるあき先は名りしあり

不知哉川  
一名大坂川

本巻一五十三

古今

いぬれとこのいぬれ川とてよ我名のいぬ

いあわとあはれとあはれぬめふたふと

後千

いさ川今や氷もあぬ乃とこの山風きく吹りし

平時光

鳥籠山  
新古今

いさ川の上小あり

あつちあ霧の枕ふゆいほく鶴とてこれ山風

後念丸

丈本

けい霧れらるる末れ犬とやすけふ鶴とてこの山風

為頼

日

鳴麻とみひのゆりととこれ山風の枕小聲送るく

後成

石清水八幡宮  
大坂村御社の左小あり

いさ川に戸森田氏建ふ

けい霧りる根根味下(出る道向う又右の旁小多賀より街をへ

出る道向う東園より東流の道又小野村道の右北よ小石佛

地蔵堂あり小町塚とあり

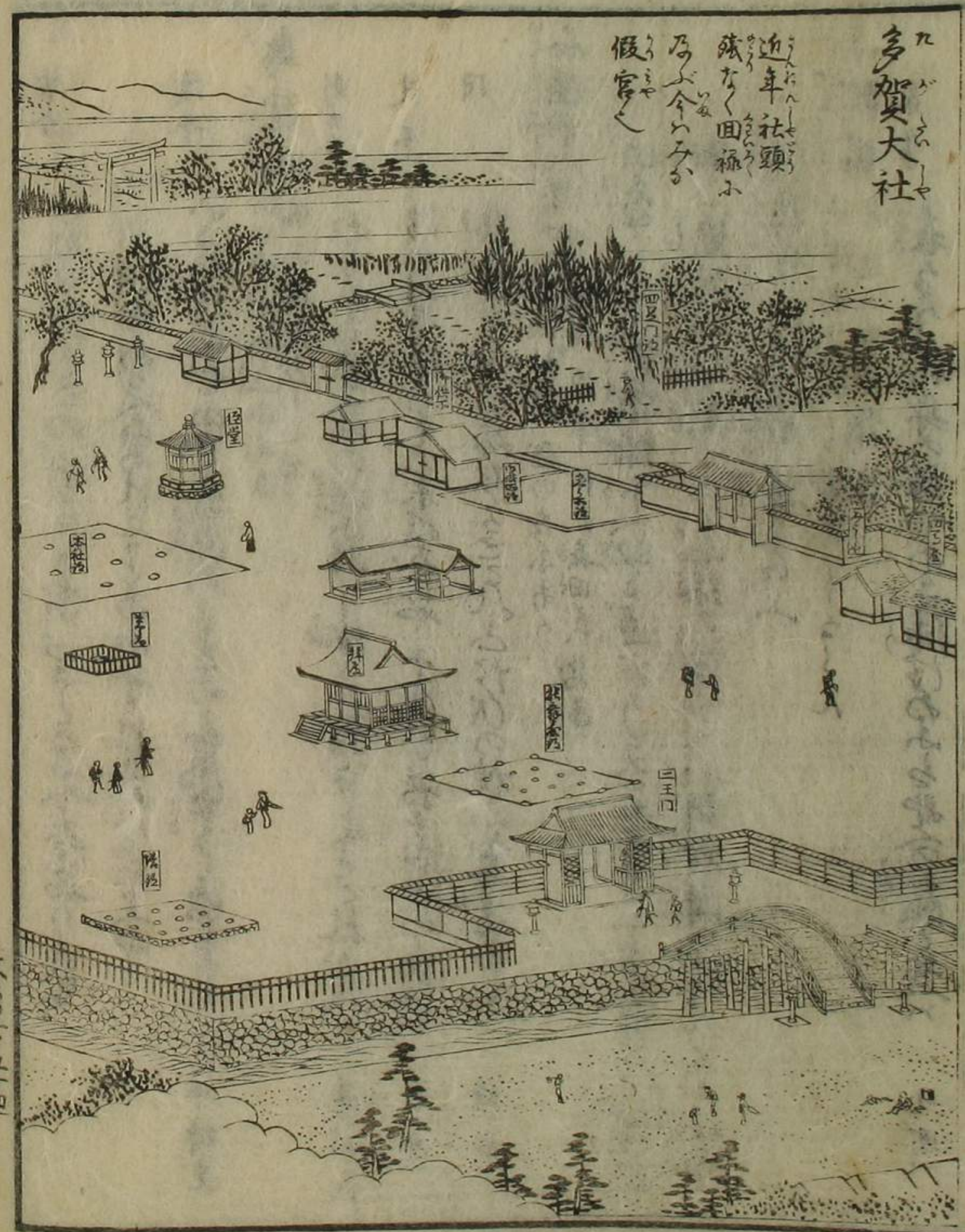
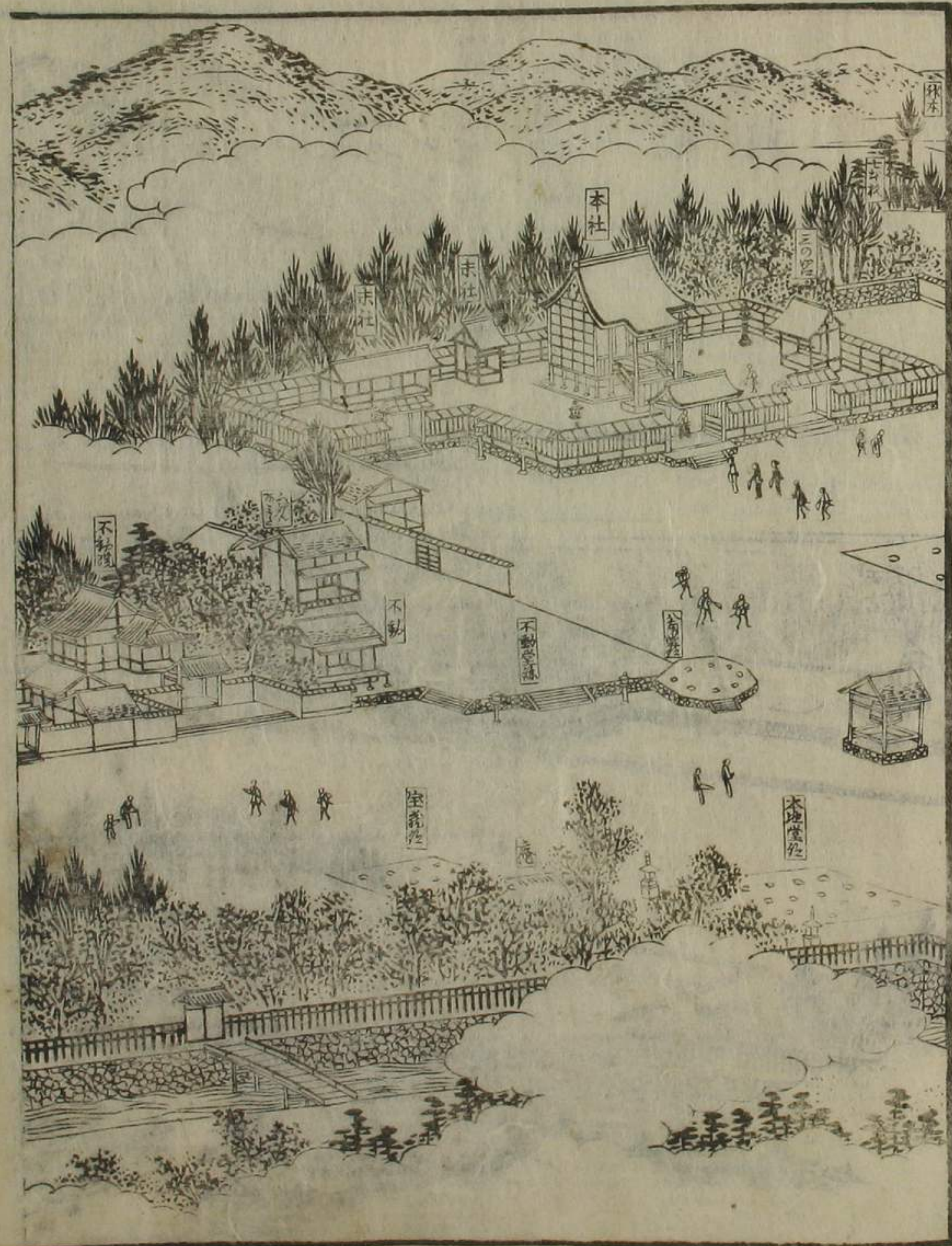
小町塚  
家集

小聖村とあり名付しうん

表より我身の果やあさ緑はあふち世の霞とあり

小町

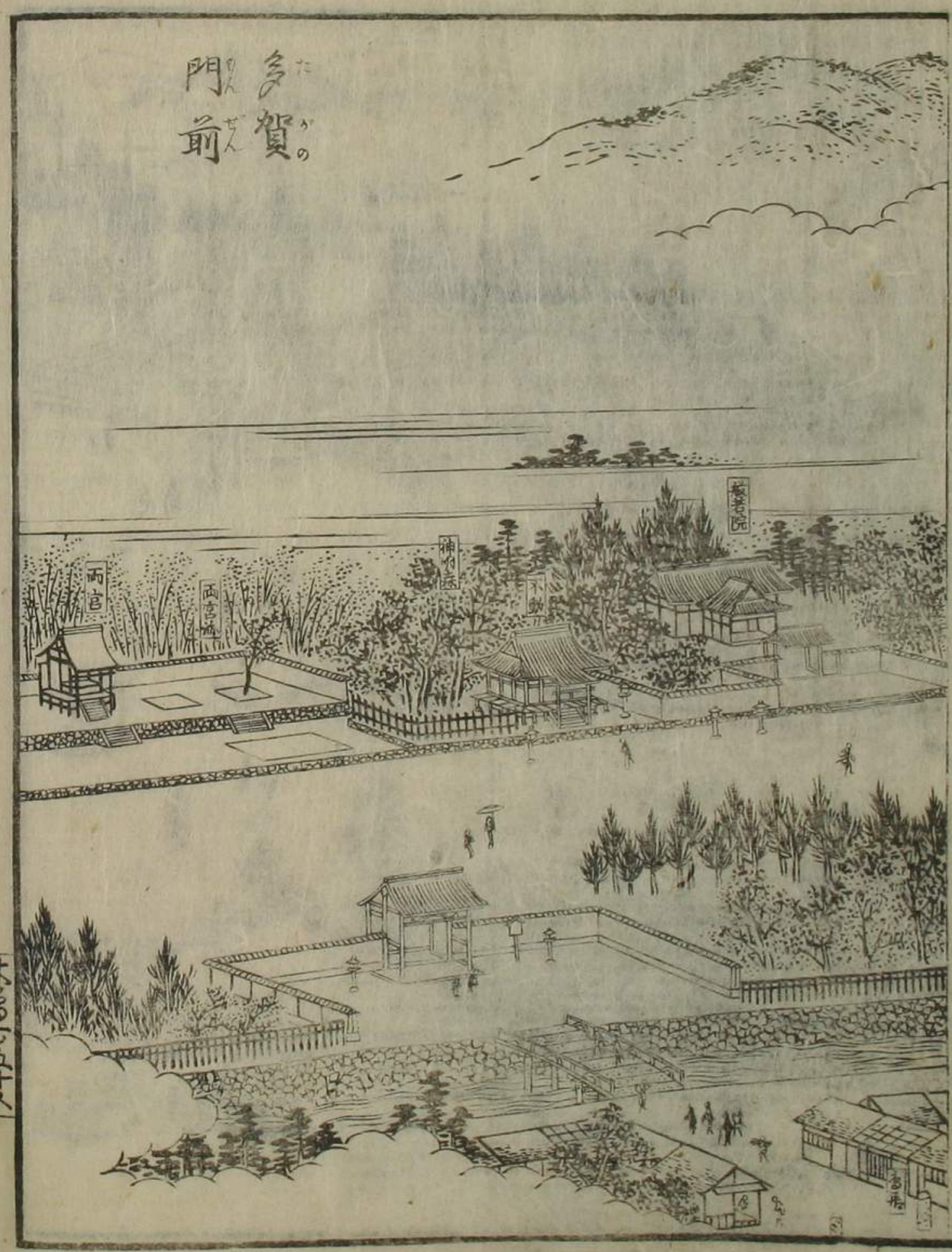




九  
 多賀大社  
 近年社頭  
 疎なく回廊  
 乃今いふ  
 假宮



多賀門前



本巻一五十五

月

真長

米原道

磨針嶺

壳根山

終るまで身は身を我と思はれど、まはす所の此邊まで 日

番場まで一里六町むら、多賀社乃名居は駅ありより  
名はふ今と形、彦指まで一里八棧六里は駅の名物神教

丸信小島長平赤玉もいふ店あり  
失倉橋とよより道あり米原へ三十町小玉街道とよより石

嶺の桑店より直下せは眼下小塚清筑摩洞の妻  
里長溪をのふ向ふ坂見まは竹生橋奥橋多景橋小舟小若志

津嶽鮮本邊にて潮水洋とたる中江ゆきより松見へく風色を  
英親より栗店より望湖堂と書しは数軒庵の等江東社観

と何ふ白芝の真流人の等名あり

大上郡小向の慶長六年舟伊家殿より  
法士名家九七百枚津城下の町八十町  
道に因ひてしる所は親善の勢助とていふうまのうらふ  
右文舟通後小こまられすのうらふのうらふのうらふ





鳥居本  
神教丸店

これがおれ  
たふのやう  
とく病も

薬は  
ういひ

赤玉  
と

雑音

夫本

日

子く松原

後古

儀寄社

祭神 日本武尊

を人小之は名あり、神儀摩此角、海とらふ右の方、中町  
をより入まは社あり

筑摩社

祭神 市杵嶋姫命

若宮祠

本巻一五六

ひこやき草花門と定一町、八重松と井小速ひるが

よを懸す、松原の山は、朝日、月、心を晴く、去る、我々の日

外と松原村とより

言より、地を、此松原らなり、並花、千之と、君を、万代

松原村と、海、二十町、神あり

儀村の生、古神と、例、祭、四月八日

オのく、松原と、坂、一里、をより、色、任、江、小、石、の、鳥、居、本、は、

儀、意、松、原、と、ひ、く、一、里、を、より、色、任、江、小、石、の、鳥、居、本、は、

を、人、小、之、は、名、あり、神、儀、摩、此、角、海、と、ら、ふ、右、の、方、中、町

をより入まは社あり

祭神 市杵嶋姫命

若宮祠

純信

并乳母

大巻口  
お長



近江國清之は明神也。神事より其神乃御地といはく  
女此男一たるが如く細く細く細く細く其の祭れ日をてまはる  
るわ男あはる。一たる人を見まはる。りわて。わて。わて。わて。  
形ど志はまはる。物のみ。て。て。て。て。て。て。て。て。て。て。  
おと。して。いの。神。を。た。り。た。り。た。り。た。り。た。り。

此社は近喜式小載をある坂回都の丹日種神社をうん元  
むろ。土端の附。種を被さ。酒。子。小。馬。て。り。し。て。あ。は。は。ち。意  
の。中。より。一。つ。出。て。あ。れ。は。く。豆。の。飯。と。炊。く。る。意。せ。し。と。せ  
團。由。今。を。は。祭。を。え。は。り。て。毎。家。四。月。八。日。流。摩。の。生。土。子。乃  
中。より。幸。ハ。ハ。ツ。より。十二。歳。中。の。女。幸。紙。を。て。り。ら。ん。を。所  
端。を。一。つ。被。さ。馬。帽子。持。長。を。て。り。し。て。神。社。に。帰。り。て。も。す  
流。摩。野。の。神。社。の。西。北。地。と

万系

且妻里

流。摩。野。の。神。社。の。西。北。地。と  
流。摩。野。の。神。社。の。西。北。地。と  
流。摩。野。の。神。社。の。西。北。地。と  
流。摩。野。の。神。社。の。西。北。地。と

長濱

此。地。の。名。産。を。條。編。細。綿。繭。綿。釣。其。外。種。々。の。物。あり。所。居  
凡。て。掛。所。許。あり。條。ひ。地。境。不。晴。是。り。原。は。地。を。豊。后。秀。吉  
將軍。山。放。生。寺。舍。那。院。長。八。幡。宮。一。山。北。一。坊

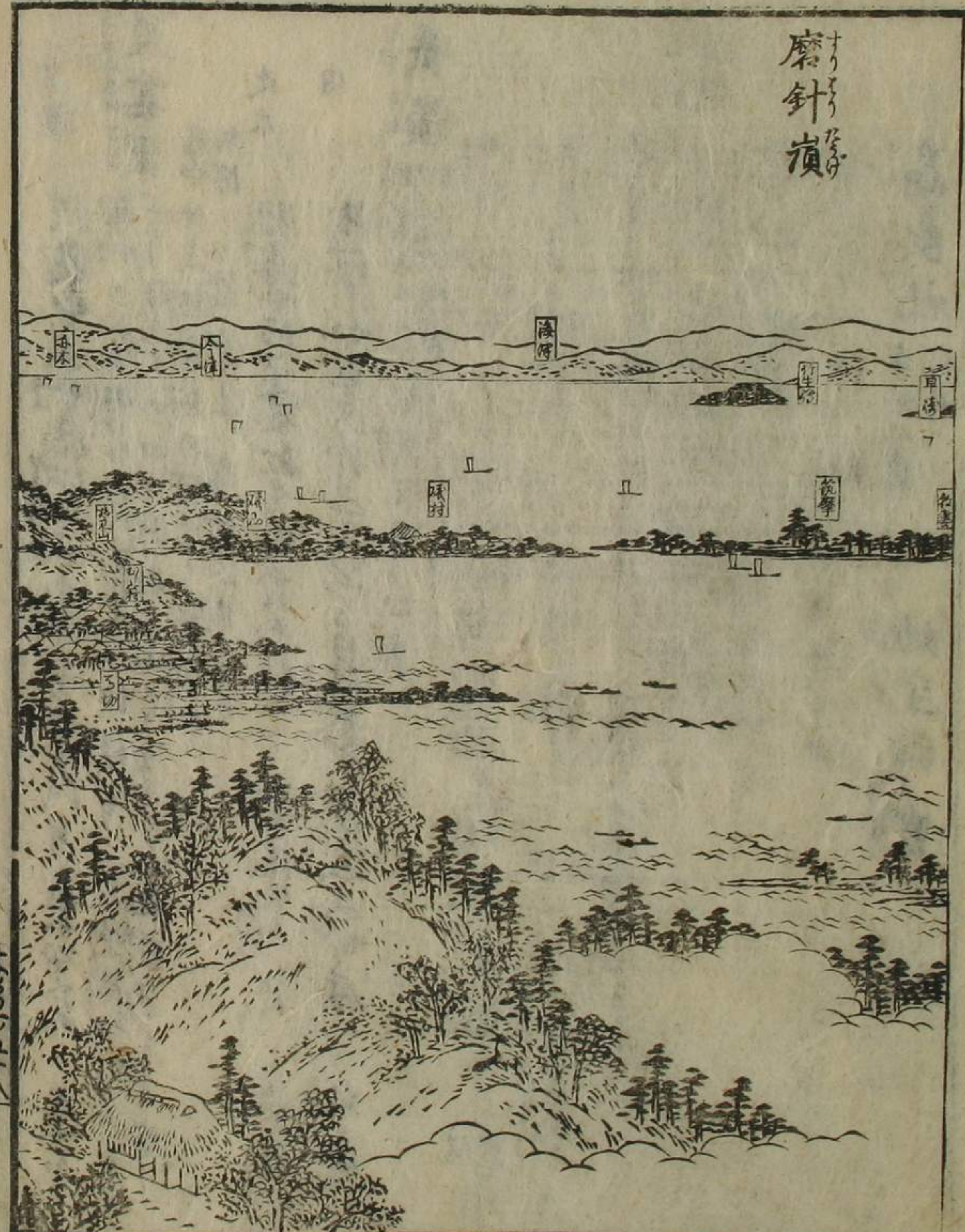
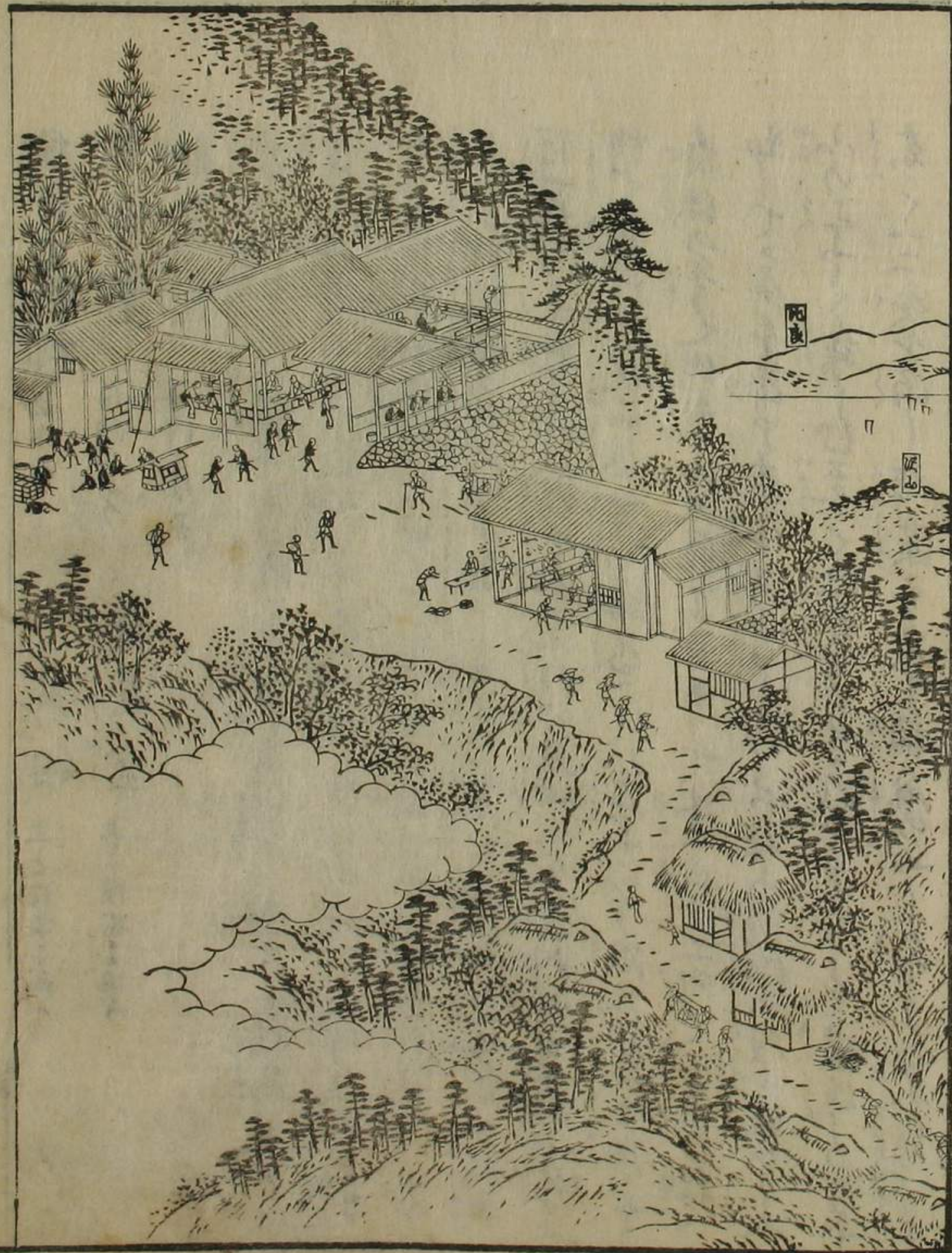
幸社八幡宮

幸地堂阿弥陀佛

高良社

地主神宮





針  
子  
磨  
針  
痕



熊野三所祠 西ふあり

薬師堂 日所みあり

護摩堂 日所みあり

稲荷祠 上と日ふあり

地藏堂 上と日ふあり

當社と初を八幡を即義家公東夷征伐の時より勅造しその  
厚く崇めあつて社於三千石寄附し其後後三條院勅額  
せし所の勅使下向あせられ放生舎を祀りや内里を果つる  
天正の氏信長の代大いふ慶一秀吉公御在城の時再營あり社於  
百七石寄附し其坊中妙覚院の庭中に曾呂利新左衛門が  
所之清浄地跪石恩智の梅宮とこれ庭ふあり波月臺の額を  
春深の節に例祭と九月十五日ありて素山十二所と云ふ社  
出でてこれを経ると其山の所よりわらわ風流の程云云を  
山のよりと云ふ至る壯観ありこれをいむとて遠近よりこよ  
あま二夜を泊し群集する半指麻のあり名あり地長原

筑摩の明神

弁月之

神

神

神

質観





とて學名高しは津波所西の方小ありて創宗は神室之刀其  
外種これ神樂あり神樂と秀吉公の代營ありしと我世所事  
糸の糸目より芝居親ありハ拍子の音ありて後ひといふ方あり  
寔小英雄此後傑のたし免至終ひ其遺風今小ありて目を  
喜しむる幸鄙少くびりた奇觀也

竹生島

後井郡船中島あり海の空の徳とをいふと積るとは  
練七十五尋あり百十尋東の岩下の岩小東西一廻りあり  
本社辨財天女辨財天女と号し長瀬あり七寸三分一尺小  
宇賀神左右二神阿吽宇賀神と称れ  
親音堂四臂千手像長六尺二寸行基の他  
祖堂西國巡禮二十番の札所  
神社考云

竹生島者在江州湖中其巖石多水精寶珠本  
朝五奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州

地折湖水始港駿州富士山忽出焉景行天皇

十年湖中竹生島初涌出云

昔行基菩薩來此島時神女現形逢基基初建  
寺置辨財天女像

竹生島什寶

小枝笛義經所持 鼗辨慶所持 吉次太刀

依藤太太刀天狗爪 馬角二股竹

傳教大師最勝王經弘法大師船板名號

玄上琵琶撥松室童子琵琶 七ナカワノ毛

依藤太十種内露硯仁和寺覺寛僧正水精數珠

土像布袋弘法大師作 矢嶋御所代々系譜

感通傳云

松室の仲養小法師童あり後本竹生島小棲一日童子來り  
毎年三月十八日あり竹生島小法師神仏會あり口籠を其後あり  
願くは所の琵琶以傳人仲養これ小琵琶を与ふ仲養も湯水に



海之一夜仲高子の舟仲華詠伝

神とあるは海のゆりけよふく花頼む仲の傳う那

仲華

北神出送奇

春の夜乃信圓の白蛇知りけ漕舟にね月の人らん

三月十八日よみ生傳ふ蛇とほるる雲井もるのふ喜樂安也須史ありく

喜して蛇の内ふあそもの何う身重たはらふ事よあそつて琵琶く

仲華と結瓜抱き款貝止匠別は琵琶伝く小納く仲華も後下

其面麗々登りて其終ふ不瓜を伝 叔書出

源平盛衰記云

平経政は傳ふ消て神ゆ法樂の物小一曲を強んて伝き琵琶とて出

形人や它室の安ん幸へて寺傳即琵琶と抱く與ふ不傳政ゆき

とせ給ひて樂ニツテ強く後弦上石上とのふ秘曲伝強ト給ふ神

納受やあそひひむむ社檀より白狐物く遊びる社不思伝か伝

正琵琶伝聞く神明の化理とめつ下けり思ひ所頼成我疑あり

てうきつてふ

朝妻祀

朝妻の  
野の  
ゆりけ  
白蛇  
の  
神  
傳  
り

あられがり

よふも

おほふも乃

うう控妻り

蕭疎



あはれんは乃の櫻して  
あつらひは波よきくを  
伝の船はきつひれ法まや  
ア、ほくあそひは本をすれや  
ら伝をさつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつて



子早振神小祈のりるも志落くも色乃ちるれあり  
 竹生流乃そは小島ありこれよりとせは又生せし傳あり又傳は傳あり  
 上勢田川の中流中黒津の太山山よりありは小傳あり竹生流あり  
 てさふさふありしとてさふさふ毎年三月三日傳はるれとてさふ  
 あり廻七十位間水面より又こふ傳はるれ伝あり  
 琵琶湖 南北二十里東西七十八里并或は四五里定て湖週六十里湖も  
 積千載 風さるにあり水海空をわく月影清し仲津岩中  
 日 波も水は短あふ乃ね夜浦風きくくぬりぬ  
 新渡拾 月ひそくやてる浦乃れれがしは焼あはの煙さほ  
 夫木 月ひそくやてる浦乃れれがしは焼あはの煙さほ  
 解湖海 伊香那小あり東西二十所南西二十所小の峯よりれ傳集りて  
 夫木 夜ふさこの浦風きくくぬりぬ  
 日 頼伝

本巻一六三

雑和集

道江國余船のうとに織女れりて水ありて小きりもこさ美  
 ろり男ありあひてぬと墨敷て衣城よりたりれをさふづこ入陽と  
 のぼらでやと其男れ妻小成て居るひふたり子とてうとせせ  
 ちほ小形糸にれれ天上のやんあ痛ど一とれ七夜を結とる  
 ちんたるよは男との入りたりて其間小け子父乃りてとて天衣  
 とりて何とれ女とてさひくそ種伝きて飛上りふさこの子に  
 契りなると我身ちれ身てあまおれりてあまあま月  
 七月中ふり中ては湖の水とあま一其月ふるふゆひ結下  
 中て別の泪をる人流しる供其子糸今中て有る形人傳り  
 曾丹集 上さぬらみきつるれれとてあまの羽衣傳つらんや  
 諸云小神天神は天女の神子とてつり因縁余吾のほふ天衣  
 の神ありる神傳りて今とありしとれん  
 醒井中て二十所長流より糸系して傳りて東山道とて  
 たりれ磨針嶺伝とて坂路をあるれ程りかく番馬の驛

番馬



あつたはるに家々を平記し見くらは堂とて名を傳ふ

八葉山蓮華寺

聖馬の御中あり

奉尊

聖徳太子御化

長三尺許

敵頭梅

寺あり

六波羅山

寺あり

尚寺

尚寺とて宮をふ敵頭梅の地ありて開基道日法師作姓を土肥二良

元頼即堂の左方小暮あり時宗二十五世阿上人より小暮川より

今宗ともえ弘二年五月九日尚山系山の麓一向堂の基に於て小條

の連族及び隨士四百餘餘人系都足利勢丹討負これにて落すあり

自害を尚寺に去慄ありて執事糟谷十郎と記れ

去程小六波羅系勢の合戦討負く因東へ落らく由披露あり

乃れあたり志此京日夏妙ひそ多川小野四十九院を針菱馬

太平記云

一人一夜の程小馳あはまりて先帝才の宮御道世の伴より修儀の  
禁裏小懸ひて所居ありする故大將小取よりて錦乃所懸を片と東山  
道才の難所番馬の宿の末形小山北峯に取の宿の下より細  
乃を申にをさかぬけり表ぬれば城後守仲時志の宿の宿と立  
て仙驛とて宿の宿を宿とせしむるなり此の宿を八幡寺とて其子孫  
小あありしなり此宿の宿散りあり今とて宿小七百餘也を足  
ざりたる宿宿より退りける幸もあふ防交は是にて宿本親友  
附信瓜の後陣小あせられ賊徒道を掃く幸ゆふあちして乃を  
あけしとて糟谷三希小先陣を打せられ香樂流小流し流す馬  
の侍と越んとする所本親千九款道瓜中にをさかぬを一面小する人  
瓜子後とて宿のけり糟谷を宿小これをもとて思ふと尚山蓮華乃  
懸意とも宿人の物具利んとて宿を宿のたかんとて宿をあて宿  
宿もは命を宿を宿の宿の事へともあはれ只一切けふけちして







於しと云ふ小二十六騎のほりものも馬のとも成るきてせりけ  
 うりける一陣とてあくる陣伏し百餘人ふるの處よりよききて二  
 陣の勢小進きたれ精苦も一陣の軍にうら勝今かをもも小陸家  
 者あはせん安くさひて勢勇のこれりあふもさるる末の山路  
 通小月ふとせれば流乃旗一流こは流よるびて兵五六千  
 人が程要害をふりてけりけり精苦二陣の勢の大勢を見ん  
 退屈してせりける言さく四ヶ嶺とせり人馬ともふはれて款  
 險退小なり相進けり夫軍せん今もは夫程も射そりて  
 款そりてこれ大勢なり鬼もも角あもるる今もさるる今も  
 藤よは雲の育るふふふりあて後陣の勢がせおはなる越後  
 先陣小軍めりと陣と馬と甲めて馳本の人精苦二布越後もふ  
 て甲は隊と馬矢取の死ぬぬ死ぬ死せぬ死をさると甲るる  
 一たるの理もさる我等放りて討死せりけりその日命

本若一六十五

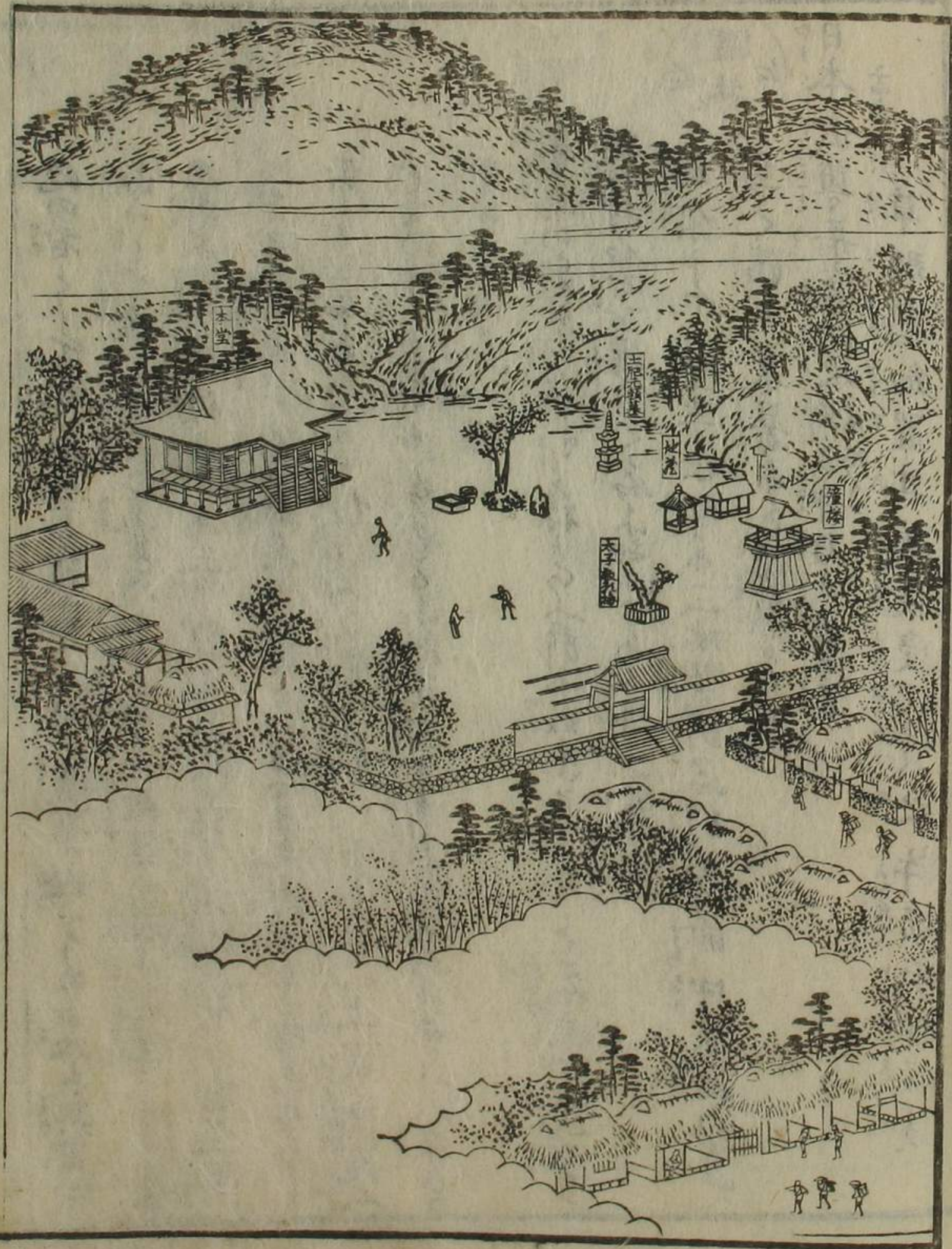
狐嶋とておれそで落きて来りて今さひる死回支井人のあふ  
 のさるる狐嶋種のもふはさる幸に精く進款は一所たりりあ  
 けり身命と捨と抄拂ひても通くけり推量はふはのては二族  
 初より謀及の張幸にさりけり一折と得て英徳國をば通きりて  
 せははらんとせん吉良の二族も度々れらふ意せりて遠江の玉城  
 塙と揃て作せ風吹ひひくは安合ぬ幸いなりこれ狐嶋小うけ  
 てる退治せん幸恐くは勇猛の勢もくもけひけり一攻やわさる  
 人の身もあふ人馬たふはれ美の二筋はもさるる射及き力も  
 なく成て作らざりて中を落のひさきた後陣の作本城は作せ  
 迫江の國引くさるるさわねさるる城本たて精ひて安東  
 勢の上落しあふんと清治さるる中なる越後守仲時もは候  
 と存せられも作本さるる今いづる勢もあふんたのさるる形  
 さるる進退さるる面々の意見とさひやんとあふさるる何



さるば堂小帯くたすにて時信が待てくこ我を伴定あつてわくと六百餘  
騎れ兵もみか過堂の庭も我をうめる作本利及時信と一里  
をりり引さうりて三百餘騎打なるがうらふ天魔波旬の志いさあつ有  
る六波羅殿と表馬の作と世伏せふ取あつれ一人も逃れられ  
流ひたりとせ告うらる時信今いさあつた中うあつる中とち川  
より引起し格人あ成る京朝へ登ふが越後守仲時とつと時信  
と違しと待ひひるが待期を死に時うらわれ六波羅と時信もや  
欲ふらうらる今といく引く一引くまでうあつるあつればさう  
小腹ときんさる物と申一途ふを定る字文帰くくがうら  
る其時軍勢たふむひて空ひるる武運中うやく傾とて南家の  
滅亡迫るふ有る一せ見あひるる弓矢の宿敵なり日頃のよも  
と忘るびて是を付もひ後ふらう中うふ言あつその  
報附の思ひ海せうども一家の運をふさぬら何とてうと

報まき今と我のくくの為小自害して生糸の報恩死後小報せん  
とあむる仲時不肯うらうども平氏一教の名あがふ身うられ敵  
定る我首をうらて源氏の事小く料を補る忠小備の人と云果  
ぶ信言のゆ小禮ぬとてあつとぬを腹うら切る物あ小禮言さ  
宗秋をを見とあつと禮の神小のを信を押して宗秋をせす自  
害して真途の御をを信とあつと信ひはる小先とせのひぬ  
幸とせはとつれ今生もて合此際乃御あ逢見とて弟とせ其  
途るんをて見とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
池竹中いんて越後守が柄中を腹小はさささささささささささ  
て已が腹小はらと仲時を時小とせ付らうらつとせつとせつとあ  
是と始とて信と本徳及宗司子息治郎左衛門月三郎善房月三  
善丸高橋五郎左衛門月三郎長月又忠希月三郎善房月三郎  
源七左衛門尉月三郎善房月三郎善房月三郎善房月三郎善房月三郎







洗の者として都合百三拾式は時小腹を切つる血を其身に  
注して恰も美河の流るる如く死骸を産み充満して着本  
乃因小美河に波さるるの二年のてうさふらん小亡びさるるの幾  
に百万の士卒河に溺るらんもこれれを色も色も衣も衣も  
幸とも目もあてられざりや言も形も形も主上上皇を死  
どもの何うさふ河に流るる小肝も心も身も小死あされ果さ  
せおつらふ 下畧

番馬の宿旅りてかみ結とらふ所小死さるるも本原の道あり  
樋口村石打を通りて名小死さるるが井小着く

醒井

柏原まで一里半は駄小三水四石の名所あり断中小流れ有て  
至く清く寒暑も増減あり

日本武尊居寤清泉 所の中程民家の敷

古事記云

草那藝劍置其美夜受比賣之許而取伊服岐

能山之神幸行於是詔茲山神者徒手直取而  
騰其山之時白猪逢于山邊其大如牛爾為言  
舉而詔是化白猪者其神之使者雖今不殺還  
時將殺而騰坐於是零大雨打惑倭建命此  
白猪者非其神之使者當其故還下坐之到王  
神之正身因言舉見惑也

倉部之清泉以息坐之時御心稍寤故号其清  
泉謂居寤清泉也

十王水

西行水 西行民家の裏小あり岩間う清氣涌出ん  
池子の里流あきも怪一と幸らんを多しと

西行水

水よきと教之てと沢登の名小そひ流る川乃面石

宋茂

日本武尊腰懸石 居寤水の傍小ありこれ小沖腰をうけられ  
寤石 腰をうけて休息ありとあり

寤石



蟹石 練の山前洞窟にあり

明神影向石 賀茂の神は石の上にお宿りし

は里へ天降りしん神のまゝのまの影向石

仲暮

賀茂明神社 御泉の上の山小夜宮あり

地藏堂 石像の安ん長又尺許許所是

紫石燈籠 地蔵堂の傍にあり

されん皇十二代の帝景行天皇の皇子初御名小碓命然

曾建の足牙両人と減し給ふに倭建尊と名馳りて東

夷を安ん平らげ御凱陣の時伊弉山の懸懸毒草吹敷し

たすくしの清泉とて清い給ふと忽平愈ゆしくなり給て

多しとて九年歴二千八百餘年不及しも亦奇之水と

とてどもその名水とて清く清く清く清く清く清く清く

とてどもその名水とて清く清く清く清く清く清く清く

本巻二六十九

名春風もよ夏と心を素麩と冷して穢垢不けんみは清泉の清い

川とあるを兼せて清い岩るうありて物礫要乃水

水と清きなるの礫井ふらぬ世の流成りてやとむ

解井の本流乃清きむすくして清く清く清く清く清く

核中も夏とあわぬの清く清く清く清く清く清く清く

汲く清い人ともあふ礫井れとて清く清く清く清く清く

きの子立物乃名礫井の清く清く清く清く清く清く清く

夏の日暮結ばすは水とて清く清く清く清く清く清く清く

十七日の夜も小礫井とて清く清く清く清く清く清く清く

まはるはひも小礫井とて清く清く清く清く清く清く清く

まはるはひも小礫井とて清く清く清く清く清く清く清く

十六日

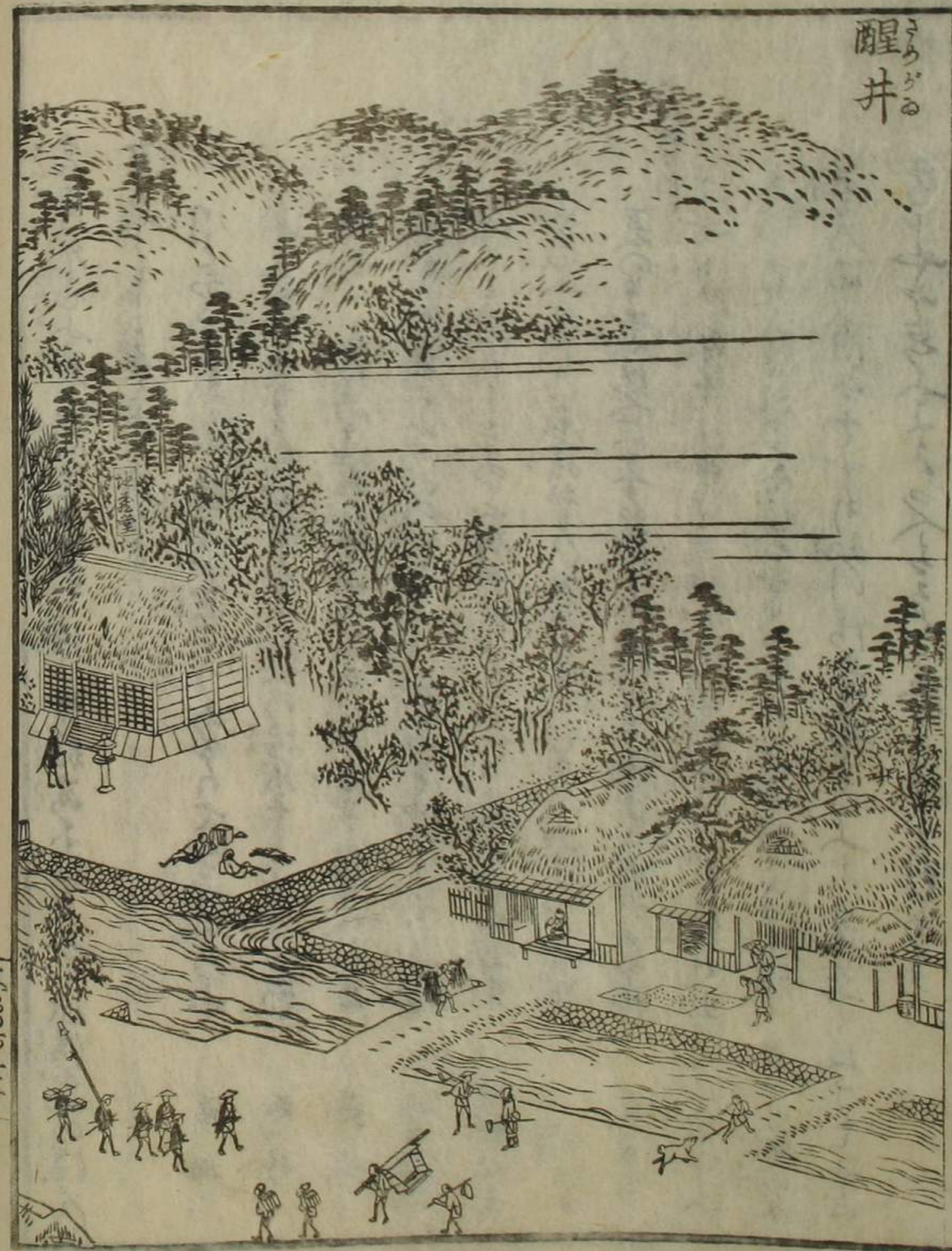
井





此所也  
三水回石の  
名蹟あり

日本武尊  
居寤清水  
腰懸石



醒井











